

法然の前節で見たように『無量寿経』の本願の三心と『観経』の三心を同一視した。そこから総別の三心と行具の三心という選擇本願念仏を支える思想が展開された。さらに法然は『浄土三部経』の三番目にあたる『阿弥陀経』に説く一心不乱の一心についても言及しているのである。

ある意味では、法然は善導が經典を離れて（經典の根拠を示さずに）解釈した部分について、再び經典に結び付けて浄土経、換言すれば凡夫往生を確固たるものにしたと言っても良いであろう。

『阿弥陀経』の一心と『観経』、『無量寿経』の三心とを直接的に対応させている法語類に『要義問答』と『十七条御法語』がある。

『十七条御法語』（『法全』四六九頁）には『観経』の三心『阿弥陀経』の一心不乱は皆これ至心信樂であると言ひ、『無量寿経』の願文を含め帰するところは同じであると述べている。

『要義問答』（『法全』六二六頁）では、善導の釈であると前置きしてひとたび三心を具しでのち、命終わるまで金剛のごとく乱れないのを一心不乱と言ふと述べている。次に私釈として至誠心と深心を合わせて、命終わるまで乱れないのを一心不乱と言ふと述べている。

また、法然の比較的初期の著述である『阿弥陀経釈』に

一心不乱者、念仏時心不散乱、至誠信心、專念一仏名也

〔法全〕一四九頁

とあり、『要義問答』と同様一心を至誠心と深心とに解釈しているように読み取れる。これからの法然の言葉をどう理解したら良いのであろうか。法然は、本願と『観経』の三心は明確に対応させた。また行具の三心のところで述べたように一向専念の念仏に自然に三心が具足するとも言っている。さらに、『念仏往生義』に

三心といへる名は各別なるに、たれとも、詮するところは、た、一向専念といへる事あり

〔法全〕六九一頁

一すちに弥陀をたのみてふた心なければ、不定業をは弥陀も転し給へり

〔同書〕

とあるように、三心が一心に帰することはたびたび強調されているところである。しかし、『阿弥陀経』の一心と『観経』の三心が完全一致とまで断定している語は見当たらない。けれども『阿弥陀経』には一心不乱のちに、この説を聞いた者は「応答発願生彼国土」とあり、回向発願心を発すことが前提となっているので改めて説いていないとすれば、完全に一致すると見ることが出来る。

ただ言葉になっていなくとも、『浄土三部経』の往生の正因たる心は皆同じであるという法然の意図は読み取れるのである。

しかし、ここで問題になるのは、一心不乱に対する散心の念仏であろう。次にこれに対する法然の見解を見ていきたい。

●第八節 散心の念仏

善導は、『観経』において三心の説かれている部分を「散善義」として、心が散った状態での往生の正因・三心を説くのである。すなわち、散乱した心だからこそ口に念仏を称え、誠の心で深く信じ往生しようと思うことが必要であるとするのである。

法然は『明遍僧都との問答』（『法全』六九二頁）の中で散心の念仏についてまず回答を残している。散心の念仏についてまず「源空もちからおよひ候はす」と言い、心が散乱状態であっても、仏願力によって往生しようとおおらかに念仏をすることが重要であると述べている。さらに、人間には目鼻があるように散心があるのだからそれを捨てようとしても難しい、散心ながらにして往生できるからこそ本当にありがたい本願なのである、と述べているのである。

このように見ていくと、法然の意図するところは散心の中に往生の正因たる三心があり、